



20090816/ 休日向上計画-その1/ 脳神経外科速報 19 (10) 2009



かわざかな水槽

医療法人社団)涼風会 佐藤脳神経外科 佐藤 透

最近ちょっぴりはまってる、かわざかな(淡水魚)の生け捕り、その後の水槽飼育の楽しさを、みなみなさんにご紹介致します。



カラフルなパーマークのオイカワ、いかつい顔のカワムツ、銀色斑点のズナガニゴイ、一本すじの通ったムギツク、すらり清ました青銅色の若アユ、岩陰に潜むオヤニラミ、川底をあさるカマツカとズジシマドジョウ、流れに食いしばって耐える岩肌のヨシノボリなどなど。冷水の水槽を、ところ狭しと泳ぐかれらの姿に見入り、しばし時を忘れる。

子供の頃、小川や田んぼ、用水路や溜池に出かけては、メダカ、ドジョウ、フナ、ドンコ、鯉、果ては、雷魚やうなぎ、イモリやザリガニなどよく採って帰ったもんだった。庭池の水換えて、バケツ2杯のザリガニを捕まえて、大なべで塩茹でし、醤油味で堪能したことを覚えている。そういえば、ドンコもウシガエルも、いろいろと食った記憶がある。



ふるさとの川にもどって、川の狭きに驚き、子供らとおそろおそろ網を入れてみる。もうおらんかな?と思いきや、カダヤシ、こぶな、川エビもそこそこに採れた。おっ、妃フナも一匹混じってるじゃん。

川の中流・上流には一味違ったいろいろなかかわざかな達がまだまだ生息している。ダム予定地でのモトクロス観戦に出かけた際、暑さしのぎに川に入った。なにげなく探った川底に、見たこともない金兜のドンコっぽいのがいた。カマツカとの出会いだった。

浅瀬の流れに抗して潜っては、砂地に埋もれたカマツカを探す。泳ぐ彼らの逃げ足は鯉のごとく速い。しかし、砂地に潜った彼らの姿は、少々間が抜けて滑稽である。砂をかぶって目玉の部分だけを覗かせて、しっぽの先が枯れ木のように見えている。しめしめ、にんまり。隠れてるつもりの奴さんを、そのまま一瞬で押さえつけて素手でゲットする。すぐ隣に2-3匹隠れたつもりの仲間が見つかることもある。



すぐそばをびゅんと横切った奴がいた。なんだあれって?そのまま石場に逃げ込んだ。手を滑り込ませて、指先に相手を感じ取る。そろりそろりと石を動かして指を進める。岩間に手を入れて、手のひらに獲物を囲い込んで、やんわりと指に挟んで、逃がさないように引っ張りだす。ズナガニゴイじゃん、やったあ。手のひらに動き回る獲物は、何とも言えない、なつかしい感触、これって病みつきになってしまう。

うわ物、なか物のさかなは、すばしっこくて、網ですくわせてくれない。岩場に逃げ込んだとしても、手掴みするのは到底無理である。釣りもいいけど、無傷で生け捕りするなら、やっぱ投網だなあ。投網打って雑魚の生け捕りじゃ。何軒か漁具ショップを廻ったけど、手ごろな投網の現物は置いてない。そこはやっぱり通販だね。糸の素材から、網の目合、節、裾目数、重量から選べる。ワカサギ・若アユ狙いで、3.0分、18節x1000目、4.0kgを選んだ。

届いた投網を担いで、早速庭で練習。興奮を抑えながら、それっ一網打尽と網を放した。しかし、網は開かず、振り回した錘が頭上に降ってきた。危ねえ、これじゃ、魚が捕れんどころか、怪我するね。早速、ネットの投網講座でコツを学んで、あとは子供らと競争で練習に励んだ。左肘・左手・右手で手取りして、回転と遠心力を使ってパアツと火花を咲かせる、あの三角投法をマスターした。といっても子供の方がやっぱり升上手いなあ。網の補修も糸の結び方も、外科結びだけじゃなくていろいろとあるもんだ。



からっから天気が続いた、虎の子の休日。かわざかなが捕れると聞くと、道具一揃い携えて、子供ら乗っけてすぐに出かけた。龍頭の滝・山野峡から芳井にかけての小田川は、絶好のポイント。黄色いパーマークが出る前の若アユ、顎棘のアカムツ・カワムツ一家、岩間に潜むムギツクの群れ、きらりと動く擬似眼のオヤニラミ、深緑黄色の鳴き魚ギギなどなど。なかでも、投網の裾袋で飛び跳ねる、婚姻色のオイカワは、陽光を浴びて、エメラルドとアクアマリンにルビーをちりばめたような、凜とした宝石の輝きを放つ。

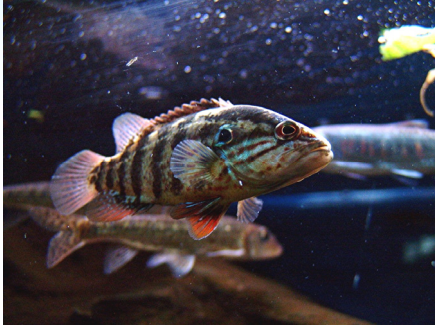


これこれ、やっぱり自然のものは、最高じゃなあ、と見入っていると、後ろからしわがれた声が出た。ひと目で一杯入るとわかる爺さん。あんたらあ、まだ網打っちゃあいけんでえ、鑑札もつとるんかあ？ 漁協が廻つとるけえ、捕まるでえ。遊魚券あとで買おう思うて、なかなかおらんこともあるけえ、試しにちょっと打ってみとったところじゃけえ、と屁理屈で凌いだ。採れたてのうなぎを自慢げに見せて、ふらふらしながら魚籠を提げて、軽トラをぶりぶり唸らせて立ち去った。そっちの方こそ捕まるでえ、警察に。

ごっそり捕えた獲物は、生け簀網からクーラーボックスに移して、エアポンプを廻して持ち帰る。恐る恐る蓋を開けて、あ〜あ、いっぱいこと“うとおとる(=died)”。なまんだぶつなまんだぶつ。試行錯誤、体表の擦れからくる感染の予防に抗生物質(エルバージュ)を混ぜて殺菌し、コンビニで氷袋を買って、そのままクーラーボックスに突っ込んで、5-10℃に冷却する。魚の動きも酸素の消費も抑えられて、このところ生存率は99%が確保されている。



かわざかな達は、1200x450x450mm の上部ろ過水槽に、冷水機・ポンプを組み合わせて、みんな



いっしょに混泳させている。水温は、18℃に設定しておく。水草も育つし苔も生えず、エサも少なめで、魚の消耗も少なく快適である。水質の管理は、あれこれ試してみても、人の技量では難しい。結局のところ、ろ過バクテリアの力を借りて、食物連鎖の管理をすることで解決した。今では、日々の餌やり、週一の水替え以外、ほとんど世話なしで、自然界に近い水環境を得ている。

はにかみ屋のかわざかな達は、照明に慣れると、デジカメ撮影の美しいモデルになってくれる。時代の流れのなか、命の尊さと生まれ育つ環境の大切さを思いやりながら、子供らといっしょに水槽を眺める。い〜いひと時である。

CONFIDENTIAL